殺人鬼の視る世界

安藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼の視る世界

【Ｎコード】

Ｎ２３６５Ｖ

【作者名】

安藤

【あらすじ】

これは、とある殺人鬼の物語。世界なんて滅べばいい。世界なんて消えればいい。そんな事を普通に思う少女の生きる道。

（前書き）

コレを書いた時の頭の中が作者自身にも分からない。

世界は喜劇と悲劇に溢れてる。

誰かがそんな事を言った。私はそれに同感するし同調するし当たり前だと思う。

どうせこの世界も誰かの作りモノで、誰かの創造の範疇で、誰かが暇つぶしに想像した世界に違いない。

私はそんなくだらない事を考えながら山を歩く。

転生者。

下らない神が、下らない理由で、下らない世界に私を転生させやがった。

知らない世界に知らない常識。

ある程度の知識こそ与えられたが、それこそトンデモないファンタジーな世界だった。

魔力に魔法、魔法具に気。今まで居た世界の常識じゃ考えられない。

原作ブレイク、とか、原作崩壊、とか、ハーレムだとか純愛だとか。

そんな有り触れた事なんてするに値しないし、やる気も無ければ

私は女だと心の中の私に突っ込む。

麻帆良学園中等部、３－Ａというクラスに編入する事になっていると神の野郎から私は聞いている。

こんなつまらない世界でも、多少は私の暇つぶしになってくれるのならいいのだけど。

◆

山を降り、まだ部屋が無いと言う事でホテルに泊まって、登校初日。

限りなく鬱で、限りなくだるくて、限りなく面倒くさい。

世界なんて滅べばいいし、世界が滅ぶのは困る。

矛盾を考えながら担任と言われた少年の後ろを歩く。

ネギ・スプリングフィールド。この世界の主人公。

きっとこの子は世界の創造者に祝福されて、誰かを知らないうちに踏み台にして、いつの間にか世界で知らぬ者のいない存在にでもなるのだろう。

世界なんて滅べばいい。なんて戯言を考えながら気付かれない様に溜息を吐く。

制服をキッチリ着て、何を見ているのか分からない目をして、担任の質問をぬらりくらりと避けて、今ここにいる。

親元から離れるけどどうとか、親が居ないって資料とかに書いてあるでしょ。読めよ、無能。

前世の私は普通に暮らして、普通に過ごして、何事も無く普遍的で小さな事が大事件で、大事件が小さな事で。

親なんて、知らない。捨て子だったから。

そこらの図書館で本を読みあさって、戯言なんていいまくって、今からでも『』付けて話してやろうかしら。とか考えてる。

先生がドアを見て止まる。

ドアに挟まった黒板消しを見て、苦笑していた。

「あ、すみません、先に入るので、後に続いてくだ……」

私はそれを言い終わる前に、唯無造作にドアを開ける。

黒板消しは私の頭の上に落ちて、黒く長い髪はチョークの粉で白くなり、足元の縄にわざと引っ掛かり、振って来たバケツを避けず、飛んできた矢を避け無かった。

それを見て、彼女達は笑う。

私はバケツを取って、矢を取って、頭を払う。

あんな幼稚なトラップしかけてる時点で、それにかかった人を笑ってる時点で、このクラスの人間の程度が知れる。

第一印象は、最悪。大嫌い。

「あ、え、えっと、では、自己紹介してください」

「零崎式織」

自己紹介をしろと言われ、名前を言ったのに、何の反応も無いのか。

半分冗談で付けた名前だけどね。神に貰ったのは『直死の魔眼』『ナイフを使う才能』。

零崎には憧れるけど、家族を知らない私には縁のない人たちだ。

というかいい加減反応しろよ。

「え、えっと」

「はい、じゃあ私が質問するけどいいよね、ネギ先生」

頭をパイナップルの様にした少女が言う。

「じゃ、質問。何処から来たの？」

「何処からなんて一々覚えてないよ。施設で厄介者扱いだったし、転々としてたから場所に興味も無かった」

それを聞くと、パイナップル少女は冷や汗をかきながら話を逸らす。

戯言に決まってるじゃない。

「それじゃ、趣味は？」

「読書。後は静かな所でぼーっとするのが好き」

読書ときくと、数名の子達がざわめいた。

耳障り、真っ赤な眼をしてる私は睨みつける。という訳じゃないけど、眼を『蒼く』して視界に入れてみる。

『点』と『線』の世界。一度実験しておいて良かった。頭が痛くなるから。死なない様にはして貰ってたけど。

ちょっと、切ってみたくなる。

殺気が漏れ出たのか、数名眼の色を変える。私の様に文字通りという訳じゃないけどね。

「じゃ、最後に何か言いたい事があったらどうぞ」

丁度よかった、私は言いたい事があったんだよね。

「……じゃあ言わせて貰うよ。私は、このクラスが大嫌いです。第一印象から何から何まで全てが嫌い。仲良くしようとも仲良くして欲しいとも思わないし、友達になってね。なんて事を言うつもりも無い。精々卒業まで嫌々一緒に居させてね」

笑顔で言い切った。

ほぼ全員がぽかんとしている。アハハ、面白い。

「……ちょ、ちょっとあなた。幾らなんでもそれは無いんじゃありません事！？」

金髪の女の子、委員長っぽいこだからあだ名はいいんちょだね。

「ちょっと委員長。押さえて押さえて」

驚いた、本当に委員長だった。私の勘は当たるんだね！

戯言だけど。下らない。

席は予め指定されている。態々先生が言う事なんて無い。言うのは漫画の世界だけだ。ここはその世界だけどね。

隣に座っているのは、コレまた金髪のお人形みたいな小さい子。

殺したくなってくる。零崎って名前にして良かった。殺人鬼は私にピッタリの名だ。

精神は神のおかげで頑強になってる。発狂なんてしない。

涙なんて流さない。同情なんてしない。

私は唯殺したいがためだけにこの世界へ来た。

戦いたいなんて戦闘狂（バトルジャンキー）じゃ無い。殺すだけ。

圧倒的強者が圧倒的弱者をなぶる所なんて、素敵じゃ無い？

そんな戯言めいた事を考えながら授業を過ごす。

◆

授業が終わり、下校時刻となる。

私は誰とも話さず、誰とも眼を会わせず、黒い髪をなびかせながら寮へ帰る。

血が見たい。血を見たい。

そんな事を考えながら直死の魔眼で辺りを見る。

景色が変わる。風景が変わる。

全て、万物には綻びがある。その線と点。

つい、笑いたくなってくる。

三日月形に口を歪ませ、寮へと帰り、ナイフを手の中で弄ぶ。

夕方になり、夜になり、外に出る。

今宵は満月、誰かを殺すには丁度いいんじゃないかな？

殺される子には運が無かったね、としか言いようが無いけど。

桜通り。うん、ここがいい。

桜の花弁の様に、真っ赤な真っ赤な血をぶちまけてやりたくなる。

ナイフを服の中に隠して歩く。すると、一陣の風。

「零崎式織……転校初日に襲われるとは、運が悪かったな」

街灯の上に立つダレカ。

自然と、口には笑みが浮かぶ。

「悪いが、血を吸わせて貰う」

そう言って、飛び降りて来る。笑いがもう止まらない。

眼を使い、ナイフを抜いて、高速で振るう。

一瞬で線を切り裂き、真っ赤な血をぶちまけさせ、血の濃いにおいをかいだ私は、もう声を抑える事なんて無理だった。

「あハハはハハハハハはハハ！！」

「ぐ、あ、……どう、なって」

笑いをこらえながら、バラバラにされた少女を見る。

隣の席になったマクダウェルさんだった。友達になってくれなくて良かった。本当に。

だって、殺すのに友達だったら躊躇するでしょ？

なーんて、戯言だよ。

そんな事を思い、歪んだ笑みを張り付けて、ナイフを振り下ろす。

点を突かれた少女は、驚きに染まった顔をして絶命した。

返り血が全身に着く。でも、そんなのは一切気にならない。

笑いが止まらない。殺すのが快感に感じてしょうが無い。殺人鬼になった気分だ。いや、殺人鬼か。

他の零崎が存在しなくて、本当の零崎は殺しが快楽じゃ無くても、関係無い。

私という『零崎式織』は、殺人を楽しんで、愉しんでる。

（後書き）

何で書いたんだろうか……。

でもなんとなく投下してみた。後悔も反省も無い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2365v/

殺人鬼の視る世界

2011年7月28日03時29分発行